

# 中学生の文章表現過程の研究

——書く速度について——

川 口 博 子

わたしたちの文法教育研究会では、昨年十二月二十日、市内の大洲中学校で、中学生の作文が書かれていく過程を観察しました。この観察によつて得た観察記録を整理するにあたって、私が担当した「書く速度」について、まとめたことを次の順序で報告します。

## A 文章表現過程の観察

### 一、動機及び目的

#### 二、観察

##### (一) 予備観察

##### (二) 本観察

### 三、観察記録の分析、整理

## B 書く速度について

### 一、書き出すまでの時間

### 二、書く速度

#### (一) 書かれた量と時間

#### (二) 書く速度の型

##### (1) 書く速度の型

##### (2) 書く速度の型と性格

##### (3) 書く速度の型と成績、性格

##### (4) 書く速度の型と学年

### 三、書き終わってからの時間

## A 文章表現過程の観察

### 一 動機及び目的

言語表現の特色は、その形式に時間的性格をもつことであると考えられる。書く過程を時間的にみることによって、書かれたものを見ることだけによつては得られない言語表現上の問題が見い出されるのではないだろうか。こう考えて、わたしたちは中学生の文章表現過程を観察することを思いつた。

同じような試みは、すでに千葉大学付属第一小学校、及び長野県埴科郡松代町立豊栄小学校で行なわれ、その研究報告の一部を倉沢栄吉氏の「表現指導」にみる事ができる。これらの研究は、いずれも作文指導に結びつけて行なわれたものである。作文を個々のこどもに即して正しく指導し、作文に客観的、合理的評価をくだすためには、こどもと作文を結びつけて見なければならぬ。すなわち、作文の表現過程を観察し、それに基づく分析を通して作品をみていく必要があるという考えのもとに行なわれた。

わたしたちの場合は、文法教育の立場から、観察することによって書くことにおける文法指導のありかたを見い出そうとした。いわば文法指導研究のための基礎作業として、中学生の作文の表現過程を観察したのである。

## 二、観察

### (一) 予備観察

本観察実施の五カ月前の昭和三十五年七月十一日、安佐郡祇園町の大下学園で中学二年のクラスを対象に予備観察を行なった。その結果、表現過程の観察が可能であること、観察によって生徒に与える心理的影響は少ないことなどがわかり、一応、観察成功への見通しをもつことができた。

### (二) 本観察

期日 昭和三十五年十二月二十日(火)

対象

広島市立大洲中学校一年F組、二年E組、三年C組の各々七名の生徒。被観察者は、成績、知能偏差値の上位、中位、下位のものそれぞれ二名を選び、さらにその二名が外

向的性格のもの、内向的性格のものになるようにした。

(性格別は大洲中学校の先生に判断していただいた。)

ほかに、各学年一名ずつについてテープレコーダーによる観察を行なった。

### 作文課題

「友達」

具体的にも、抽象的にも書けるであろうという考えからこの題を選んだ。生徒には当日時間のはじめに板書して与えた。

### 時間配当

用紙の配布と説明 五分

作文を書かせた時間 四十分

アンケート 五分

### 観察方法

(時間外に被観察者に面接した。)

一人の生徒に二人の観察者がつき、一人は生徒が書く通りを記録用紙に書き取り、同時に停止箇所を印した。他の一人は、各行に要した時間及び停止時間を秒単位にはかり、記録した。

テープレコーダーによる場合は、生徒が書く通りをその速さに応じて無声音でふき込み、あとで再生して書かれた作文と照らし合わせ、時間を書き込んだ。

### 三 観察記録の分析、整理

観察によって得た観察記録は、次のような項目で、研究会会員が分担し、分析、整理した。

#### (分析項目)

I 表現過程の考察

(1) 停止について

(2) 書き改めについて

(3) 書く速度について

Ⅰ書かれた作文について

(1) 文章と文との対応について

(2) 接続関係の種類

a 文と文との接続関係

(4) 書き出しの文、第二の文、結びの文

(4) 文と文との接続関係(図式化)

b 接続関係を示す諸形式(接続語、指示語、同語反覆など)

c 段落

(4) 段落意識の有無(形式と有無)

(4) 段落と段落との接続関係

(3) 文章の様相

a 文の形態と文章の様相

(4) 文の長さ

(4) 文末の形

(4) 文の様相(主述、修飾被修飾、方言、敬語、会話文と地の文、副詞の呼応など)

d ことばの特別な使い方と文章の様相、語彙

c 表現形式と文章の様相

(4) 句読点

(4) 諸記号

B書く速度について

書く速度、すなわち筆運びが、人によって異なるのは当然である。ただ、書写の場合は学年に応じた速さが要求される。しかし作

文の場合は、書き出す速さに思い出すか、想像する力、考える力が加わったものが書く速度である。作文の場合の書く速度は、書かれる内容と深い関係があるように思われる。

教室で書く作文は、限られた時間内に完成しなくてはならない。そこで、与えられた時間をいかに使うかが、大切な問題となってくる。

生徒はどのように時間を使っているか、どんな速さで書いていくか、以下報告する

一、書き出すまでの時間  
各々の生徒の書き出すまでの時間は第一表のとおりである。

第一表

一年		A	B	C	D	E	F	G
氏名								
書き出すまでの時間		15	8	0	34	70	12	60

二年		H	I	J	K	L	M	N
氏名								
書き出すまでの時間		0	60	0	37	6	77	0

三年		O	P	Q	R	S	T	U
氏名								
書き出すまでの時間		94	130	55	26	64	95	1350

中学一、二年では、書き出すまでに最高70秒、77秒かかっている。

る。書き出すまでに時間をかけた者は、少なくとも書き出しは苦勞しないて書いている。

△一年E V (書き出すまでの時間70秒) 友達は、<sup><23</sup>たくさんいませ<sup><6</sup>。

その中でもとくに仲がよいというのは、<sup><6</sup>三人から<sup><2</sup>四人<sup><5</sup>ぐらいです。

△二年M V (書き出すまでの時間77秒)

ほとくの<sup><4</sup>友達は<sup><2</sup>川崎君<sup><2</sup>と谷君と今<sup><2</sup>村君<sup><2</sup>と岡原君です。その中で<sup><8</sup>よく<sup><15</sup>けんかするのは川崎君<sup><5</sup>とほくです。

数字は停止時間を示す。  
|は消しゴムの使用。  
左側の文字を消して右側の文字に書き改めたことを示す。

これに比べ、書き出すまでに時間をかけなかったものの書き出しをみると、

△一年F V (書き出すまでの時間12秒)

私しの友達<sup><35</sup>、よく<sup><6</sup>しやべるが<sup><4</sup>、<sup><4</sup>とつても<sup><10</sup>西元好美よく私しを、(名前が書いてあったのを消し、書き進む。)

△二年N V (書き出すまでの時間0秒)

私たちのクラスでは、よくあそぶものといよ

私たちの

私たちのクラスでは

くあそばないものがある。

<12

三行目

(三行目から書き始めていたのを、二行目に書き直す)

のように、あわてたためか行をまちがえて書き始め、書き直しをし

たものがある。また、

△一年B V (書き出すまでの時間<8秒)。

ほとくの<sup><11</sup>親しい友達は、安島君、岡谷君、森川君、平田君<sup><33</sup>友達は<sup><33</sup>。

など<sup><38</sup>で、<sup><8</sup>特に安島君です。<sup><21</sup>

二年L (書き出すまでの時間<6秒)

私が大洲中学校に入学した<sup><2</sup>時<sup><5</sup>は<sup><15</sup>皆と友達は<sup><3</sup>になれる私の小さかつたころの友<sup><3</sup>達は<sup><5</sup>ただ単の友達と<sup><15</sup>かして<sup><15</sup>

なと思っていたが<sup><6</sup>月日がたつと<sup><2</sup>みんなとも自然に<sup><7</sup>仲よくと<sup><16</sup>していた<sup><2</sup>、<sup><16</sup>

のように、停止が目立ち、消しごむの使用が多くなっている。特に△二年L V の場合は、一行あまり書いていたのを全部消して、全く別のことを書き出している。これは、書き始める前に十分考えて書くことが必要であることを示している。

中学三年では、書き出すまでに最高<sup><130</sup>秒から最低<sup><26</sup>秒まで時間をとっており、まず初めに考え、それから書き出すという態度を身につけてきていると言えよう。しかしまた、途中での停止も多い。

△三年P V (書き出すまでの時間130秒)

僕は幼い頃<sup><7</sup>友<sup><4</sup>達と、よく<sup><4</sup>く<sup><6</sup>チャンバラ<sup><4</sup>や<sup><4</sup>、<sup><19</sup>すも<sup><19</sup>う<sup><3</sup>をとったりして<sup><21</sup>遊んだ<sup><55</sup>もののだ、しかしこのごろでは、

<sup><28</sup>幼いこの遊びは幼ちとなり、<sup><4</sup>、中学三年ともなれば、<sup><4</sup>高校進<sup><5</sup>学<sup><4</sup>、就職<sup><7</sup>などの<sup><58</sup>難問題があり、<sup><56</sup>……

これは、初めに書くところとする内容を考えてから書き出し、途中で言

い表わすことばを考えるために停止するものとみることができ。一般に三年では、一、二年におけるような思い出すままの書きぶりはみられない。

△三年UVは書き出すまでの時間が180秒で、作文は4行しか書かれていない特殊のものであるので、ここでは、はずして考えることにする。

二書く速度

(一)書かれた量と時間

書かれた量(20字詰原稿用紙における行数)と一行の所要時間の平均とは、第二表に示すようになる。

第二表

一年		A	B	C	D	E	F	G
氏名	成績	上	上	中	中	中	下	下
知能偏差値		66	61	52	54	53	40	38
書かれた量(行)		24	35	22	19	43	40	14
平均一行所要時間(秒)		83	48	82	81	34	59	148

二年		H	I	J	K	L	M	N
氏名	成績	上	上	中	中	中	下	下
知能偏差値		51	58	53	58	44	32	38
書かれた量(行)		41	37	34	37	22	13	26
平均一行所要時間(秒)		44	55	54	46	85	106	84

三年		O	P	Q	R	S	T	U	V
氏名	成績	上	上	中	中	中	下	下	下
知能偏差値		63	62	49	47	?	33	35	
書かれた量(行)		34	22	38	12	34	18	4	
平均一行所要時間(秒)		58	105	59	194	68	167	241	

これによると、二年が一番スムーズに書いているようである。多くの量を、短い平均一行所要時間で書いていて、書く速度は一番速いと言える。  
五分毎に、書かれた文字数をかぞえて、学年の平均を出すと

学年	量	平均一行所要時間
一年	28行	65秒
二年	20行	68秒
三年	26行	62秒

(100秒(△UVを除く。))

となつて、ここでも二年の書く速度が速いと言える。

未完のものを除いて書かれた量と、平均一行所要時間の学年平均を出すと、

三年の書く速度は、一、二年より遅くなっている。また、各学年とも書き始める前に時間が知らせてあり、終る時刻の10分前には合

図がなされたのであるが、三年に未完のものが多くなっている。作文を書きあげることのできなかった者についてみると、成績下位のものが多いようであるが、それにしても三年にだけ片寄っている。

一、二年が自分のまわりの友達を想起しながら書き進めるのに対し、三年は友達を観念的に書こうとしたからであらうかと思われる。このことについては、後にふれることにする。

(二)書く速度の型

(1) 書く速度の型

各行に要した時間を、折れ線グラフに表わしてみると、いろいろの形のものができる。それらは、時折長い時間がかかっているため出入りの激しいもの、目立った起伏がないもの、その両方の要素をもっているものの三つに大別できる。

この区別は、標準偏差を求めることによって、明瞭にすることができる。標準偏差は、各行で要した時間が、それぞれ平均からどれだけはずれているかを示す数字である。すなわち、各行に要した時間が、どんなにグラフ上に散らばっているかを示すものさしとなる。グラフの変動が激しいものの標準偏差は、大きい値となり、変動の少ないものは小さい値となる。各人の標準偏差値は第三表に示すようになる。

第三表

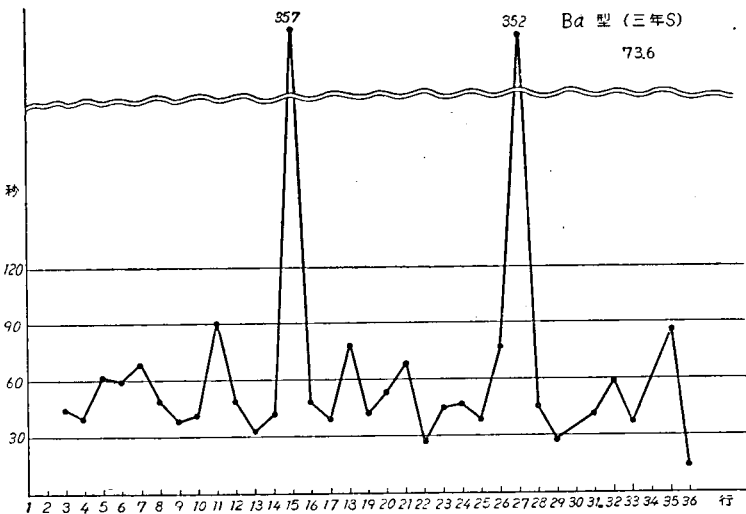
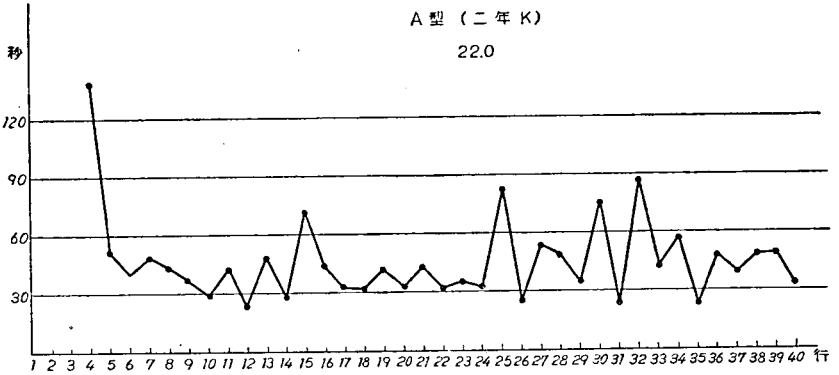
一年		A	B	C	D	E	F	G
氏名	成績格	上内	上外	中内	中外	中外	下内	下外
成性	格偏	66	61	52	54	53	40	38
知能	値偏							
知差	標準							
標準	偏差	80.6	21.6	89.2	51.3	18.7	51.3	143.2
二年		H	I	J	K	L	M	N
氏名	成績格	上外	上内	中内	中外	中内	下外	下内
成性	格偏	51	58	53	58	44	32	38
知能	値偏							
知差	標準							
標準	偏差	26.3	28.4	25.0	22.0	65.4	44.4	56.3
三年		O	P	Q	R	S	T	U
氏名	成績格	上外	上内	中外	中内	中	下内	下外
成性	格偏	63	62	49	47	?	33	35
知能	値偏							
知差	標準							
標準	偏差	34.0	42.0	49.6	182.5	73.6	83.6	70.5

これをグラフの形を参考にして分類する。標準偏差30未満のものをA群、偏差80以上のものをC群、残りの偏差30以上80未満のものをB群とする。B群の中に数字に関係なくA、C群どちらかに似ているものがある。特別の箇所を除けばAの型に近い形になるものをBの中のa (aB型)とし、変動の巾がCの型ほどでないが、比較的広いものをBの中のC (Cb型)とした。分類表は第四表、それぞれの型のグラフは第五表に示す。

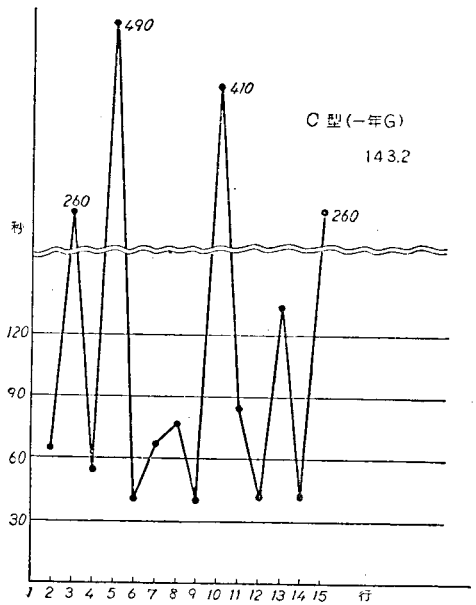
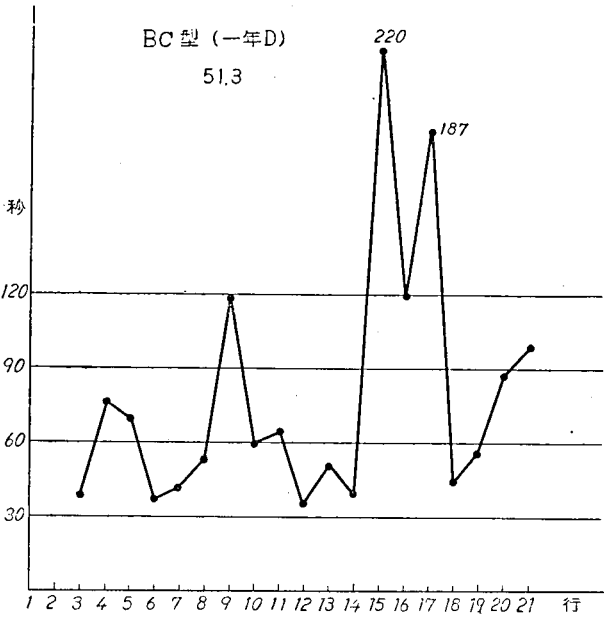
第四表

A (30未満)	B (30以上80未満)		C (80以上)
	a	c	
E (18.7)	Q (49.6)	O (34.0)	A (80.6)
B (21.6)	F (51.3)	P (42.0)	T (83.6)
K (22.0)	S (73.6)	M (44.4)	C (89.2)
J (25.0)		D (51.3)	G (143.2)
H (26.3)		N (56.3)	R (182.3)
I (28.4)		L (65.4)	
6	3	6	5
	9		

[U (70.5) は除く]



A型及びB型は、ほとんど書き進めていったもの、C型及びBc型は、考えたり、読み返したりしながら書き進めていったものといふことができる。作文の時間の後で記入させたアンケートの答によると、A型に属するの一人、B型に属するの二人、C型に属するの一人が、「つぎつぎと書いていったので、読み返しなどしなかった」という項に○印を入れているだけであるから、生徒の側の意識としては、どの型に属するものも「それまで書いてきたことを考えた



り読み返したりしながら書いていった」ことになる。  
 グラフをみて明らかのように、A型は分量が多く、その当然の結果として各行の所要時間が短くなっている。反対にC型は書きあげた量が少なく、一行に要した時間が比較的長くなっている。このことは次のようにその推移をはっきり見ることが出来る。

平均行数 平均一行所要時間

A型	38行	47秒
Bat型	37行	62秒
Bc型	23行	87秒
C型	18行	135秒

A型からC型へと移るに従って、何らかの理由で書く速度は遅くな



っているのである。

(2) 書く速度の型と性格

生徒が内向的性格であるか外向的性格であるかによって、文章の書き方、この場合は筆の進め方に相違があると考えられる。性格によって、A・B・C三つの型をわけると次のようになる。

	A型	B型	C型
内向性	2	4	4
外向性	4	4	1(人)

外向的性格のもの、どちらかと言えば長く停止して考えたり読み返したりすることなく書き、内向的性格のものは、筆を止め、考えながら書くことが多いと言ふことがわかる。このことは、作文指導が個人の性格に応じてなされる必要があることを示唆しているように思われる。

(3) 書く速度の型と成績、性格

成績	上	中	下	
	1	1		2
内向性	A	1	1	4
	B	1	2	4
外向性	A	1	2	4
	B	2	2	4
内向性	A	1	2	4
	B	1	2	4

A、B、C三つの型は、ある程度成績と関係をもっている。外向性が多いA型は、外向性の中でも成績の上、中位のものだけに限られ、反対に外向性で変動の激しいC型は成績の下位のものだけにあてはまる。内向性の者の中では、成績が外向性の者におけるようには作用していない。成績上位のもの

でも内向性の者には、C型に属するものがあつて、成績下位の者と人

数はかわらない。

A型には、内向性、外向性ともに成績下位のものが属していないことから、この型が成績と関係が深いことがわかる。C型は、どちらかと言えば、外向性の者にみえるように、成績下位の者にあてはまるが、内向的性格においては、成績に關係しない。

(4) 書く速度の型と学年

学年ということがこれらの型にどんなに作用しているかをみると次のようになる。

	A	Ba	Bc	C
一年	2	1	1	3
二年	4	0	3	0
三年	0	2	2	2

三年生にはA型がない。三年生は全体として、具体的な友達のことを書くのではなく、友達観を、友達の観念的にとらえ、遠べよとしたことに關係があるのではないだろうか。別の題が与えられていたらこういう結果にならなかつたかもしれない。「友達」という題で書くように言われ、卒業を前にしていた三年生は、自分の得てきた友達をふり返つてみたのだと思われる。三年生の作文の中には他の学年には見られない次のようなことが見える。

△P V 友達關係とは、そういうものではなくて、わからない所、むずかしい所などをたがいに相談しあうものだと思う。

△R V その(友達と友達)中には、切ても切れない結びつきがある。

△Q V 私は友達とゆうものがどれだけいたせつなものがわかつ

てきた。

△S V 友達は真からよい友達をもたねばならぬと思つた。よい友達といつてもそうかんたんには出来ない。

△O V ほんとうの友達はほしいなあと思ひます。いつもどこへ行くにも一語、秘密など全然もたなくてもいい、心から尊重ぶことのできる友達が一人でもいたらと。

これらは明らかに友達論を述べようとしている。苦心して友達論をかいた、その結果どんだん筆を進めたことになっていなかったのだと思われる。

もちろん別の理由も考えられる。三年生では内容に関係なく考え／＼書くという態度になつてきているのだと言えるであらう。また三年生は他の学年よりも観察者を意識することが多いのだとも言えるであらう。

一、二年の場合は、自分のまわりにいる友達のことを具体的に書いている。そのためあまり苦勞することなく書いたのだらうと思われる。

### 三 書き終わつてからの時間

一通り書いてしまうと、普通には全文の読み返しをし、必要に応じて書き改め、書き加えをする。その時間は、人によつてちがつてゐる。ここでは、40分という限られた時間のうち、どれだけが読み返しに使われたか見ていこうと思ふ。読み返しの時間は第七表のようになつてゐる。

第七表

一年		A	B	C	D	E	F	G
氏名								
読み返し時間	103	?	369	58	300	0	—	—
読み返し回数	1	1	?	1	2	—	—	—
書き改め回数	2	1	0	1	3	—	—	—

(秒)(回)(回)

二年		H	I	J	K	L	M	N
氏名								
読み返し時間	330	?	360	212	120	908	0	—
読み返し回数	1	1	?	1	1	2	—	—
書き改め回数	6	1	0	5	2	19	—	—

三年		O	P	Q	R	S	T	U
氏名								
読み返し時間	129	—	335	—	0	—	—	—
読み返し回数	?	—	1	—	—	—	—	—
書き改め回数	0	—	0	—	—	—	—	—

一年は平均208秒、二年は368秒、三年は363秒を読み返しに使っている。(未完のもの、読み返し時間のないものは除く。)一、二年は全時間40分の約9%、二年は約15%を読み返しにあててゐる。二年だけが読み返し時間が多いというのは、他の学年に比べ、時間的に起伏なく書き進めていったので残り時間が多くとれたためかと思われる。

読み返しはだいたい一回行なわれている。書き改め、書き加えは一年で1.8回、二年で5.9回なされてゐる。三年では全然書き改めがなされていない。考えながら書くことが書き改めを必要としないのだらうか。なお二年△M Vの19回の書き改めのうち18回は句読点を入れてゐるものである。これを除けば二年は平均2.1回の書き改め

をしていふことになり、一、二年ともだいたい2箇所の書き改めをしていふと言へる。

書き改めが行われた箇所は次のようになる。

○句読点をつける 18箇所

○「」をつける 2箇所

○漢字、送りがなの書き改め 5箇所

○文字の書き誤りの訂正 2箇所

(たとえば

私のはじになるような気がして)

○助詞の書きかえとそれに伴う改め 3箇所

(自然に話のたねをつくる  
ができる)

○ことばの書きかえ 8箇所

(ほとくの二人  
三人に対する……)

○文構造の変更 1箇所

(これ以上さがつたらという私だった  
のはいついき私だ)

○書き加え 1箇所

「」をあとでつけるのは、書いている途中でもしばしばみられた現象である。句読点とともにこうした表記法一般が生徒自身のものになつていないことを示しているのだと思われれる。

ことばの書きかえでは、より具体的な表現への改めがみられる。

同じ物を作るのだ

教蓮君はほくに  
その人

書き改めは、より良い方へと行なわれているとは限らない。まちがった漢字に直したものや、部分的に書き改めたために、文脈が通らなくなったものがある。

私ら六人は後の方に集まっていづも私はどうしようかこれ以上さがつたらという私だった。  
(のはいついき私だ。)

こういふ点を考えると、文章表現の最後の段階である推敲は、もつと力を入れて指導する必要があると考えられる。

以上、文章の表現過程を観察したことによつる分析の一端をのべてきました。

この観察は、ある一定の条件の基に行なつたもので、すべての文章表現過程にあてはまるものとは言えません。また資料数としても完全とは言えません。

しかし、ここでみてきた書く速度に關すると思われる条件、性格、成績、学年、それに題、内容などは、作文を指導する場合の重要な手がかりとなるものだと言ふことはできます。これらの条件が作用する表現過程をみることは、作文指導をする上に欠かすことのできない要件であると考えられましよう。

(本学三年)